
ATUI OMOI

ウッチー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ATUI OMOI

【Nコード】

N0251BA

【作者名】

ウツチー

【あらすじ】

田仲 卓工はバスケ部の熱血キャプテンだったがインターハイ予選の試合で相手のベンチに頭から突っ込んで意識を失って気がついた時には……

プロリーグ

ここは県総合バスケットボール体育館

バスケの試合が行われている

ガッ

シュートがはずれる。

ボールは高く跳ね上がった。強豪校にしては珍しいパターンだ

「全員ボックス。絶対にリバウンドとるぞ。」

?ボックス

相手を跳ばせないように自分の体を使って相手をとめること

しかし、オレ以外はみんなボックスをしない。もう百点差以上ついている
残り二十秒。

幸いオレの方にボールがとんできた。

が、
オレの相手は180cm対してオレは165cm。

オレは渾身の力をこめて
跳んだ

オレは何とか競り勝ちリバウンドをとった。

速攻だ

オレはみんなに指示をする

しかし、みんなが動かない。

本来、オレはCセンターだからドリブルなんてほとんどつかない

？Cセンターおにもゴール下でボールをもらってプレイする

加えて、オレがバスケットを始めたのは高校からだ
ドリブルなんて初心者と変わらない。

オレはかまわず突っ込む
しかし、キープするのがやっとだ、時間が過ぎていく、そこえ

「田仲」

副キャプテンの田代がフォローに入る

オレは田代にパスを出した田代が華麗なドリブルで相手をかわし、オレにパスを送る。

田代「（これがラストパスだ）」

絶妙なパスがオレにくる
だが

相手は強豪校。ラストパスに手をかすめる

ボールはそれで外に出ようとしてる

させるか

残りは一秒

オレはライン際のボールに横っ飛びで飛び付き無理な体制でシュートを放った。

ポスト

ボールはゴールに吸い込まれた。

オレはそのまま相手のベンチに頭から突っ込んだ

そしてオレの意識はなくなった。

第一話 転生？（前書き）

これはキャプテンの転生物語です。

バスケだと思っていたひとすみません？？？

ですがいろいろな世界に転生させてバスケの話もしたいと考えてはいます

当分は野球の話です。
ご了承ください。

第一話 転生？

あゝついおもい燃やせばそれで心も体もさわやかだ
若い日はみな進んでゆけよ後ろ向くな前だけ向いてゆけよそれが青
春なんだ

聴いたことある歌が流れてる
たしか

『君は何かができる』
だったっけ

あれ？ここはどこだ？真っ暗だ

卓工「たしか試合中に相手のベンチに頭から突っ込んで」

??? 「気がついたか？」

卓工「だ、誰ですか？」
いきなり目の前に老人が現れた。

老人「ワシは神様じゃ」

卓工は驚きすぐさま正座し頭をさげた

卓工「御無礼を御許し下さい」

神「私を疑わないのか？」

卓工「とんでも御座いません。私は神様を信じておりますので」

神「苦しゅうない。顔をあげい。普通に話しかまわんぞ」

卓工「はい。僕は死んだんですね。」

神「冷静だな。だがお前はあそこで死ぬはずではなかった」

卓工「？」

神「お前はあそこでボールに追いつかないはずだった。しかし、お前は追いついた。私達としても予想外だった。私達はお前の熱いおもいに感動した。よってお前を転生する」

卓工「どこの世界にですか？」

神「キャプテンの世界だ」

卓工「あの有名な野球漫画の。光栄です。しかし、僕はバスケットで野球経験なんてありませんが」

神「私は神様だぞ。お前は本当はバスケよりも野球方が好きなことはわかってる。」

卓工「流石ですね」

神様「では能力は今のままでいくぞ。チート能力をあたえては面白くない。じゃがあの世界で頑張ればチート能力がつくかもな。なにか質問があるか？」

卓工「それでは一ついいですか？」

神「なんじゃ」

卓工「僕はバスケ部のキャプテンでした。でも僕はバスケは下手だしリーダーシップもない。僕よりも上手くてリーダーシップがある部員はたくさんいました。なのになぜ僕がキャプテンに選ばれたのですか？最後にこれだけはきいておきたかったんです。」

神様「うむ。お前さんのとこの監督はお前さんの熱い気持ちを評価しとったんじゃない」

卓工「熱い気持ち？」

神様「そうじゃ。お前さん達はプロではない。高校バスケットじゃ。高校バスケットに一番大事なのは熱い気持ちじゃよ。じゃからお前さんがキャプテンじゃったんじゃない」

卓工「ありがとうございます。これで思い残すことはありません。」

神様「じゃあこの穴を通してゆけ」

卓工は穴を通っていった

第二話 物語に入る前に

キャプテンの転生物語に入る前に少し補足説明を

僕の高校でキャプテンを知っている人はいませんでしたから？

『キャプテン』とは
ジャンプ作品の

野球漫画の一つでした。

あらずじ

野球の名門青葉学院から墨谷二中に転校してきた主人公谷口 タカオは、野球部へ入部するためにグラウンドに訪れ、練習しようとして青葉時代のユニフォームにきがえていたら大騒ぎされてしまう。ところが彼は二軍の補欠でかなりの下手くそだった。しかし気の弱い彼は周囲の期待に応えるべくすさまじい陰の努力を続け、ついにはキャプテンに選ばれるまでになり、チームを引っ張っていく。

登場人物

谷口 タカオ サード

右投げ右打ち

野球の名門青葉学院から転校してきたために皆に期待される。実は二軍の補欠だった。しかし、陰の努力を続け一流の選手に成長していく。

松下 ピッチャー

右投げ右打ち

谷口の同期で墨谷唯一のピッチャー。

フォームはオーバースロー（今では反則の二段モーションである）球種はストレートとカーブ。メガネが特徴。

ストレートは70〜80キロ

カーブは曲がったかどうかのしよんべんカーブ。

小山 キャッチャー

右投げ右打ち

谷口の同期で副キャプテン気の弱い谷口を上手くフォローする。
体型はぽっちゃりしているキャッチャーとしての能力は並み以下。

加藤 ファースト

右投げ左打ち

谷口よりも一つ下

チームで一番背が高い。

顎のしゃくれが特徴

丸井 セカンド

右投げ右打ち

谷口よりも一つ下

パンダのような丸くて黒い鼻が特徴

西田 ショート

右投げ右打ち

谷口の同期。

ケンカ早い正確

たらこ唇が特徴。

遠藤 レフト

右投げ右打ち

谷口よりも一つ下

ガリ勉メガネのような顔が特徴

浅間 センター

右投げ右打ち

谷口の同期

西田ほどではないがケンカ早い
出っ歯が特徴

島田 ライト

右投げ両打ち（おもに右）

チームの唯一のスイッチヒッター。

谷口よりも一つ下

体型は小山ほどではないがぽっちゃりしているがチーム一番の俊足
糸目で癒し系な顔が特徴

チームにずば抜けて上手い人がいるわけではなくみんな並み以下である。

彼らがどのようなチームになるか谷口次第である

第二話 物語に入る前に（後書き）

かなりキャラが崩壊してるかも？

感想を頂ければ幸いです。

第三話 **B e f o r e** 転生（前書き）

卓工が転生する前の話です

第三話 Before 転生

谷口「（ここが墨谷二中かあえーと野球部はどこかな？）」

谷口は野球部のグラウンドを探していた。

谷口「（あったあった）」

どうやら練習中のようだ

副キャプテン「ショートいくぞ」

ショート「しゃーこい」

キン

ボテボテのゴロがショートにいった

ショートはトンネルした

副キャプテン「どうしたショート？しっかり捕らないか？」

谷口「（オレがいうのもなんだけどひどい守備だな。これなら頑張ればレギュラーとれるかも。あのノックしている人がキャプテンかな？）あのすみません」

副キャプテン「なんだ」

谷口「入部希望の二年の谷口ですよろしくお願いします」

副キャプテン「入部希望？この時期に珍しいな」

谷口「転校生なもので」

副キャプテン「よしわかった。とりあえず、前の学校で着ていたユニフォームで球拾いでもしててくれ」

谷口「はい」

副キャプテン「ノック再開するぞ」

谷口はその場で着替えようとしていた

一年「ちょっとあんた、そんなところで着替えたらじゃまですよ。あ
っちの隅っこで着替えてよ。」

谷口「はい」

隅っこに移動して着替える谷口

一年「まったく。???皆さんどおしたの」
みんなはかたまっていた。そしてみんなで谷口を囲んだ。

副キャプテン 「君は青葉学院から来たのか？」

谷口 「？。はい。どうして分かったんですか？」

副キャプテン 「そのユニフォームをみれば誰だって分かるよ。何たって青葉は十年連続日本一だし」

谷口 「青葉は有名ですもんね」

副キャプテン 「よしみんな守備につけ。青葉のバッティングをみせてもらおうぜ。」

全員 「おー」

谷口 「いや、僕は球拾いで結構です。」

一年「そんなこと言わないで、はいバットをどおぞ」

谷口「(さっきと態度が全然違うけど?) 所謂いえばキャプテンは!?!」

一年「キャプテンは試合の抽選会に言ってます。そんなことより青葉のバッティングをみせて下さいよ」

谷口「(みんな期待してるけどオレは青葉の二軍の補欠だったのに)」

副キャプテン「ピッチャーは松下だ。外野バック」

谷口がバッターボックスに入る。

そして松下が投げる。

谷口「(は、速い)」

バシッ

谷口「は、はは」

副キャプテン「流石だね。ボール三分の一外れていたよ」

全員「スゲー、ボール三分の一を見分けるなんて」

松下「すごい選球眼だ」

副キャプテン「松下、早く投げろ」

松下が投げる。

松下「(しまった)」

ボールは谷口の顔面に

谷口「(もうどうにでもなれ)」

適当にスイングする谷口。しかし

カキーーーーー

何と場外ホームランを打ってしまった。

一年A「スッゲー」

一年B「やっぱり青葉のレギュラーだったんだよ」

一年C「もしかしたら四番だったのかも」

???「誰だ今、ホームラン打ったのは」

一年A「あ、キャプテン、谷口さんが打ったんですよ」

キャプテン「転校生か」

谷口「はい」

キャプテン「そうか。みんなぼやぼやするな？練習再開だ。谷口、お前は外野で球拾いだ」

谷口「はい」

全員「キャプテン、谷口^{さん}を練習に参加させましょう」

谷口「僕なんか球拾いで結構です」

谷口はそう言って外野にいった

キャプテン「今日はここまで、明後日は試合だからな」

全員「はい」

副キャプテン「谷口、お前は四番サードだからな。キャプテンにも言っておくからな」

谷口「そんなあ」

谷口の運命はいかに？？

第四話 **b e f o r e** 転生？（前書き）

またまた卓工が転生する前の話です

第四話 before 転生？

谷口は急いで家に帰った。

谷口父「タカ、今帰ったのか。どうだったよ新しい野球部は？」

谷口「と、父ちゃん」

谷口は父に泣きついた。

谷口父「どうしたんだよ」

谷口は今日のすべてを話した。

父「なんだ、簡単なことじゃないか」

谷口「と、父ちゃん。オレは真剣なんだ。」

父「ばか野郎？父ちゃんだって真剣だ」

谷口「父ちゃん」

父「要するに、青葉のレギュラーと同じ実力になればいいんだ。今から神社で特訓だ。」

二人は神社に行った。

父「父ちゃんが投げてやるからお前は打て」

谷口は足場をならして構える。

父「かっこつけないでさっさと打てよ。10年はやえよ。いくぞ。
ビシュ

谷口父が投げる。

が、

コロコロ……？

谷口の前でボールが転がる

谷口父「しっかり打てや」

谷口「ボールだよ父ちゃん、もっと近くからでいいから、この辺に投げてよ。」

谷口は指でストライクゾーンを指差す。

父「しょうがねえなあ。いくぞ。」

ビシュ

今度はストライクゾーンに入っている。

しかし

ブン

谷口は空振りしてしまう。

父「よくこの程度でお前を青葉のレギュラーだと勘違いしたもんだ。オレだったら金を払ったて信じないね。」

谷口「何だと。来いよ父ちゃん。」

谷口父「いくぞ下手くそ」ビシュ

谷口「こなくそ」
カーン

強烈なピッチャーライナーが谷口父をおそう。そして直撃した。

谷口「父ちゃん、大丈夫？」

父「たいしてことねえよ。お前の打球なんか蚊に刺された程度とか
わらねえよ。それよりさっさと構えろよ」

谷口父は続けて数十球を投げた。

時には谷口の顔面に当たる。しかし谷口はくじけずに打ち返した

父「タカ、いい顔になってきたじゃねえか。そのいきだ。後は父ちゃんとお前のどっちが先に倒れるかの勝負だいくぞ。」

それから、何百球続いたか気がついたら、谷口は家の布団に寝ていた。

谷口「あれ？確か昨日、父ちゃんと練習してて、倒れたのか、父ちゃんすごいなあ。あの後、オレを家までおぶってくれたのか。父ちゃんにお礼を言わないとな」

谷口は父の部屋に行った

谷口「あれ？父ちゃんがない？」

谷口は父の仕事場に行った。谷口の父は大工をしている。何か作ってるみたいだ。

谷口父「できた」

谷口母「父ちゃん、一睡もしないで何を作ってるんだい？」

谷口父「これはピッチング&ノックマシーンだ。これでタカのやつもいい練習ができる。母ちゃん、オレは少し寝るからな」

谷口母「分かったよ」

谷口は陰で見ていた。

谷口は泣いていた。

谷口「（父ちゃん、オレ、オレ、頑張るよ）」

谷口は学校に登校した。

谷口の噂は全校生徒に知られていたらしく囲まれた。

そして、試合の日がやってきた。

谷口は四番サードで出場し五打席ノーヒット、八個のエラーで墨谷二中はぼろ負けした。

そして、日に日に谷口に声をかけてくれる部員は少なくなってきた。

しかし、谷口はめげずに父と二人で特訓を続けた。

谷口父「タカいくぞ」

谷口「来い、父ちゃん」

谷口父がノックマシンのスイッチを押す。

キン

鋭い打球が谷口をおそう。谷口は懸命にグラブを出すが届かずに谷口に直撃した。

谷口はたまらず、倒れる。すると父が近づいてきた。

父「なあタカ、もういいんじゃないか。お前はよくやったよ。この一ヶ月間死ぬ気で頑張った。父ちゃん、お前を見直したよ。」

谷口「と、父ちゃん」

谷口は悔し涙がながれている

谷口父は谷口の肩に手をおいて

谷口父「いいんだ、いいんだ。やるだけやったんだ。気のすむまでなけよ」

谷口は泣いていた。

谷口「明日、キャプテンに言うよ。」

そして翌日、

谷口「あの、キャプテンお話があるんですけど」

キャプテン「忙しいから後にしてくれ」

谷口「で、でも」

キャプテン「谷口、なぜ守備につかない。さっさと守備につかないか」

谷口「はい」

キャプテン「いくぞ谷口カーン」

ぽろ

カーン

ぼろ

キャプテン「谷口、しっかりとれ」

谷口「はい」

丸井「最近のキャプテン谷口さんにやけに厳しくないか」

島田「谷口さんだけノックのじかんが長いしな」

丸井「やっぱり元青葉の選手ってことを意識しているのかな」

加藤「オレは信じないね」

カーン

またノックがくる

「パシッ」

島田「素手で取ったよ。すごい執念だ。」

キャプテン「谷口、ナイスキャッチだがグラブを使い」

谷口「はい」

キーン

パシッ

谷口「と、取れた。」

キャプテン「谷口、ナイスキャッチだ」

谷口「はい」

「キャプテン「よし。今日の練習はここまで。みんな集合してくれ。」

キャプテン「今日を持って我々三年は引退する。新キャプテンを発表する前にこんどの新人戦のオーダーを発表する。」

一番	ファースト	加藤
二番	ピッチャー	松下
三番	キツチャー	小山
四番	サード	谷口
五番	ショート	西田
六番	センター	浅間
七番	ライト	島田
八番	セカンド	丸井
九番	レフト	遠藤

オーダーはこれでいく

そして新キャプテンは谷口

丸井「やりましたね。谷口さん」

島田「頑張りましょう。新キャプテン」

谷口「キャプテン、ちょっと待って下さい。僕にはそんな資格はありません。」

キャプテン「どういうことだ」

谷口「キャプテン、今まで黙っててすみませんでした。僕は青葉では二軍の補欠でした。」

キャプテン「そんなことは初めてお前を見たときから分かったよ。でも、お前は陰の努力で充分期待に応えてくれたじゃないか」

谷口「知ってたんですか」

キャプテン「ああ。だから谷口、今度はその努力でみんなを引っ張
ってくれ」

全員「俺らからもお願いします」

谷口「頑張ってみます」

その日から谷口は今まで以上に特訓するのだった

第五話 卓工の過去

谷口がキャプテンになってから一ヶ月後

新人戦が始まった。

谷口率いる新生墨谷二中は一回戦で負けた。

谷口の成績は

五打数三安打一ホームー、五打点で守備では二十七個のアウトのうち十五のアウトを谷口がとった。

努力が実った。

谷口が大活躍だったが他のナインが足を引っ張った。

場所は変わって

卓工「ここがオレの新たな世界か、？え、なんかオレかなり縮んでない？」

??? 「当たり前ですよ」

卓工「どちら様ですか？」

??? 「この度卓工さんのお手伝いやくの峠坂 マリナ（とうげざか まりな）です。マリナって呼んで下さいね。」

卓工「（綺麗な人だな） よろしく願います。マリナさん」

髪は肩までショートカットで整った顔立ちにものすごくキレイ声

マリナ「さん付けじゃなくてマリナで結構ですよ卓工さん」

そう言って卓工に手を差し出す。

卓工「女子を呼び捨てはちよつと。卓工は顔を真つ赤にしながら握り返した」

マリナ「（こんなに顔を真つ赤にしちやつて）あのゝ生前に彼女は？」

卓工「いません」

マリナ「付き合つたことは」

卓工「ありません」

マリナ「そうなんですか（どうりでこの反応なんだ。でも、ちよつとかわいいな）敬語を使わなくて結構ですよ」

卓工「で、でも」

マリナ「とりあえず、お茶でも飲みますか？」

卓工「できればココアをお願いします」

マリナ「かしこまりました」

何分か後にマリナがココアを持ってきた

卓工「（おいしいなあ、なんか心が落ち着く味だ）」

マリナ「落ち着きましたか？」

卓工「ええ。大分」

マリナ「そうですか。それは良かった。落ち着いたところで本題に入りましょうか」

卓工「? ? ?」

マリナ「まず、あなたの姓は峠坂になります。そして、今は小六の二月という設定です。学校には行かなくてもいいので、思う存分野球の練習をして下さいとのことでした」

卓工「あの、マリナさん質問いいですか？」

マリナ「何ですか？」

卓工「僕はキャプテンの世界に転生して来ましたが、別に野球をしなくてもは行けないという義務はありませんよね？」

マリナ「はい、でもあなたは野球が大好きだと神様に聞いておりますが？」

卓工「はい。でも、自信がないんです」

マリナ「？。そういえば、あなたは野球が大好きなのになんでバスケをしていたのですか？私、卓工さんのこともっと知りたいです。これから一緒に生活していくので、差し支えなければ話して下さいませんか？」

卓工「はい。うーんどこから話せばいいか？まず五歳の時に、広島カープのキャンプに行きました。その時にブルペンに行きました。その時にピッチャーのピッチングをみて感銘を受けました。気がついたら、「あのピッチャーの人すごい。球がすごく速い」思わず口に出していました。するとそのピッチャーがボールを僕にくれたんです。

それから僕は野球に興味をもちはじめました。

でも、いくらバットを振っても当たらないしグラブを使ってもボールが取れない。

野球に興味をなくしました

それから、しばらくしてバッティングセンターに行ったのですが、今まで当たらなかった球が当たったんです。嬉しくて嬉しくてたま

りませんでした。

ちよっとかすっただけで嬉しくて

父に協力してもらい

簡単なフライと90キロくらいの球なら前に打ち返せるようになり
ました。

でも、クラスに野球の上手い子がいて、その子に才能がないから野球をやらない方がいいと言われました

悔しくて悔しくていっぱい練習しました

それでも彼にはかないませんでした。

彼は小学生ながらMAX百二十キロのストレートとかなり曲がるカーブを持っていました。

彼に敵わないまま中学生になりました。

彼とは同じ中学校でした。僕は野球部に入る予定でした。

でも、彼に「まさか野球部に入るつもりじゃないよな？才能がないやつはいくらいてもいらない」っていわれました。

だから、僕はハンドボール部に入りました。

ハンドボールで肩と反射神経を鍛えて、高校から野球部に入って彼に勝つために

ハンドボール部に入ったお陰で肩が強くなりました。

そして、高校生になりました。僕が入った高校は今年からスカウトを始めたらしくスカウトしてきた人以外は使わないと言われました。そんな時にバスケ部のキャプテンに誘われてバスケ部に入りました。

でも、僕の心の中には野球部に未練がありました。

でも、クラス対抗の野球大会がありました。

僕は一生懸命練習しました。

しかし、三年間で一度も勝つことが出来ませんでした。僕のクラスには野球経験者がいなかったたので勝てなかったのは分かります。でも、どんなに練習しても僕は全打席ノーヒットでぼくのところにとんできたらすべてエラーでした。

野球なんかやったことのない初心者もヒット打ったのに

僕は泣きたい気持ちをなんとか抑えました。

家に帰ってグラブを捨てようと思いました。

でも、出来ませんでした。僕は野球が好きでしたから。

でも、僕のバスケット部のキャプテンになりました。

キャプテンがそんな中途半端ではいけない。

僕は野球が好きだという気持ちを封印しました。

そして、ただひたすらにバスケットを頑張りました。

とまあこんなところですかね」

マリナ「そんなことがあったんですか。それは大変でしたね。ちょっときていただいけませんか？」

卓工はマリナに手を引っ張られていった。

すると家に隠し階段があった。どうやら地下に繋がっているみたいだ

マリナ「着きましたよ」

卓工「ここは？」

マリナ「あなたのために作られた練習場です」

卓工「オレのために」

空から声がした。
神「そうじゃよ」

卓工「神様」

神「ここで思う存分野球を練習するがよいぞ。とは言っても、ワシはちよつと手をかしただけで、このグラウンドの整備から土を運んだのはマリナだな」

卓工「えーこの広いグラウンドのほとんどをマリナさんが？」

神「ああ。そうじゃよ。お前さんが転生するまえからこの家に来てお前さんのために、部屋の掃除から何まで全部やとつたんじゃ。きつとお前さんのいい練習相手をしてくれるじゃろう」

卓工「マリナさん、ありがとうございます。オレ、一生懸命練習させてもらいます。」

マリナはにっこり笑って

マリナ「さっきまでは僕って言ってたのに、心を開いてくれたんですね」

卓工「すみません、あつくなるとオレって言っちゃうんですよね」

マリナ「そうなんですか。オレの方が似合ってますよ」

卓工「それでは、これからオレにします」

マリナ「さっそく練習しましょうか。その前にこれをどうぞ」

マリナは古びた青いグラブを渡す。

青いグラブにオレンジのヒモがついていて

黒ペンで

「TAKANORI」と書かれている

卓工「そのグラブは」

卓工は驚いている

マリナ「ええ。生前あなたが使っていたグラブです。よっぽど野球がすきなんですね。野球のことは分かりませんが、このグラブをみれば分かりますあなたが野球が大好きだって、だから神様をお願い

したんです。」

卓工「本当にありがとうございますマリナさん」

マリナ「大したことはないですよ。それより一つお願いがあるんですけど」

卓工「何ですか、何でも言って下さい」

マリナ「私のことはマリナって呼んで下さい。後、敬語は禁止。これから一緒に生活するのにいつまでも敬語じゃ他人行儀ですよ」

卓工「分かりました」

マリナ「ほら、また」

卓工「ごめん、マリナ」

卓工は顔を真っ赤にしている

マリナ「いえいえ」

卓工「それじゃ、マリナも敬語禁止ね」

マリナ「分かったわ。じゃあさっそくキャッチボールしましょ」

卓工「うん。やろう」

卓工はとてもニコニコしている

ビシュ

マリナが投げる

パシッ

卓工「いい球なげるね」

ビシュ

卓工が投げ返す。

パシッ

マリナがとる

マリナ「まあ。運動は好きだからね（本当にニコニコしちゃって楽しそうね）

次はバッティングしましょう」

卓工「マリナが投げるの？」

マリナ「違うよ。マシンがあるからそれで」

マリナがマシンを持ってきた

マリナ「最初は80キロからね」

卓工はバッターボックスに立って構えた。

マリナ「いくよ（卓工は右打ちなのか）」

ビシュ

卓工はバットをふる

カキーン

センターとレフトの間に落ちた

マリナ「ナイスバッティング。次いくね」

カーン

カーン

カーン

カーン

カキーン

カキーン

カキーン

カーカーキン

卓工は十球中十球当てた。最後はフェンスダイレクトの当たりだった。

マリナ「卓工すごいよ」

卓工「でも80キロだし」

マリナ「それはそうだけど卓工ちよつとごめんね」

マリナはそう言って卓工の腕や腹筋を触る

マリナ「なるほどね」

卓工「？」

マリナ「卓工、次は私がマウンドから投げるから、思いっきりスイングして、ボールに当たらなくてもいいから」

卓工「？分かった」

マリナが投げる

洗練された美しいフォームからボールがリリースされる
ビシュ

卓工「（アンダースローか。思いっきりふる）」

卓工「（よし。当たった）」

ガキ

コロコロ

ピッチャー前に転がった。

マリナ「やっぱりね」

卓工「?」

マリナ「卓工は力はあるわ。でも、それを生かしきれてない」

卓工「どういうこと」

マリナ「うーん。卓工、ちょっと左打席に入ってくれる」

卓工はとりあえず左打席に入る

マリナ「卓工、いくわよ」ビシュ

卓工「(さっきと同じスピードに同じコース。左じゃスイングしづらいけど)」

カキーーーーーン

ドン

バックスクリーンに直撃した。

卓工「（初めてあそこまで飛ばした）ま、マリナどういうこと？

卓工はすごく興奮している

マリナ「ちょっと落ち着いて」

卓工「ごめん、つい興奮しちゃって」

マリナ「（ちょっと可愛いけどね）今、卓工は無心でスイングしたよね」

卓工「うん」

マリナ「卓工は自分が思っているよりも力があるのよ。でも力が上手くバットに伝わってないの」

卓工「どういうこと？」

マリナ「詳しいことは、また明日説明するわ」

卓工「分かった」

マリナ「次は守備ね。私がノックするわ」

卓工「いいよ」

マリナ「取ったらファーストに送球よ。いくわよ」

卓工「よしこい」

卓工がまた目をきらきらさせる

マリナ「（目をきらきらさせちゃって可愛いわね）いくわよ」
キーン

ぼてぼてのゴロがくる

パシッ、シュッ

卓工はぎこちはないが難なく捕球し送球する

マリナ「（これはかなり練習しなくては出来ないわ。でも、まだあまいけど）」

マリナ「次、いくわよ」

キーン

さっきより強い打球がとんでくる

卓工はさっきよりも強い打球に驚いたが、懸命にグラブをだしたが
トンネルした

ボールは外野までいき、フェンスに直撃した

マリナ「卓工、外野まで行ってここまで投げ返して。（肩も見たいし）」

卓工がボールを投げ返す
ビシュ

スリーバウンドくらいしてマリナのところに返ってきた。

マリナ「（うーん80mくらいかな）今日はここまで」

卓工「分かった」

マリナ「墨谷二中に入るまでにはまだ時間があるから頑張って練習

しょうね」

卓工「（笑顔が眩しすぎる）うん」

マリナ「汗かいたね、卓工一緒にお風呂に入ろう？」

卓工「・・・・・・・・・・」ボタン

マリナ「卓工（冗談だったのに）」

こうして、卓工の転生初日は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0251ba/>

ATUI OMOI

2012年1月9日19時51分発行